

第II章

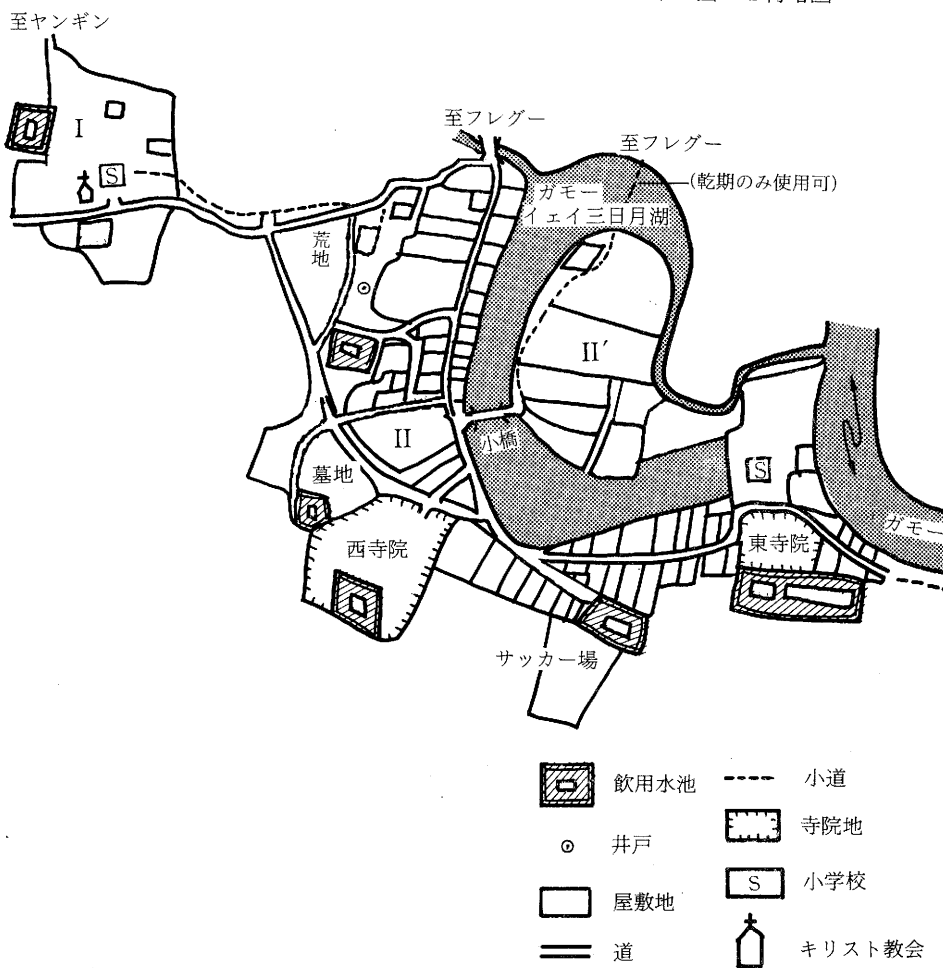
調査村の概況

1. Z村の地勢と住民

筆者の調査したZ村は、人口753(男372人、女381人)、世帯総数138世帯⁽¹⁾の農村である。フレグー郡の村々の中では規模の大きな村の部類に入るが、複数の村が結合して形成される、最小の行政単位である村落区としては比較的小規模である。なぜならば、先に述べたように、Z村は1村だけで1村落区を形成しているからである。さてここで、「村落区」は明らかに行政村であるが、自然村⁽²⁾が併合されて行政村になったという日本の例からの類推で、ビルマの「村」を自然村と考えてよいか、ということが問題となる。筆者が同時期に調査した上ビルマのティンダウンジー村は自然村であった⁽³⁾が、本章で述べるように、Z村は自然発生的にできた三つのさらに小さな村が合併してできた「村」であり、さらにそのうちの一つは他の二つと住民の民族や宗教が異なる。つまり歴史的にみるならば、Z村自体が行政村なのである。

Z村の北の入口はフレグー町の中心部から小道を南へ15分ほど歩いたところにあり、村の家々はヤンゴン川の一支流であるガモーイエイ川右岸の自然堤防上に列をなして並んでいる。すなわち第4図にみるように、村の主要部は典型的な列状村落であり、村の北口から南東部の出口までの距離は、自然堤防上を通る小道に沿って約1800メートルある。村の南側と西側にはバゴー・デルタの一部をなす広大な水田地帯が展開している。ガモーイエイ川はデル

第4図 Z村略図



(出所) 村民から入手した地図をもとに筆者作成。



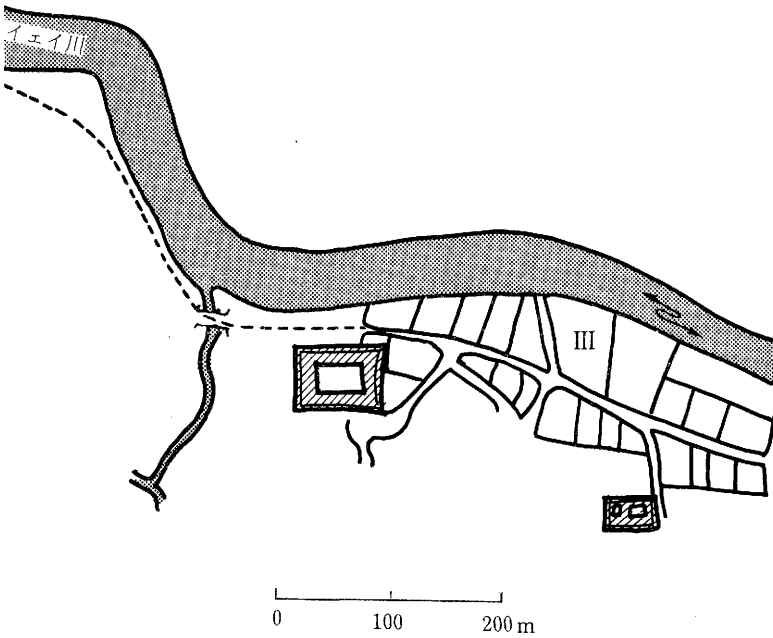
地区名

I パウッコウン

II ユワジー

II' ユワジー (ホーベッチャン)

III ユワレー



タ地帯を蛇行しながら流れ、ヤンゴンでヤンゴン川に合流する。先に述べたように、この川はデルタのそこここに見られる感潮河川である。

Z村は大きく三つの部分に分かれ、西から順にパウッコウン（地図中のI）、ユワジー（同II，II'），ユワレー（同III）と呼ばれている。

パウッコウン（pau'kōun）地区はズゴー・カイン族の集落で、この地区の村人はすべてバプティスト派のキリスト教徒である。地区内には、ユワジーやユワレー地区とは別個に教会と小学校がある。教会にはヤンゴンの神学校で教育を受けた牧師がおり、カイン族コミュニティの中心人物となっている。小学校の教育はカイン語ではなくビルマ語で行われるが、彼らの日常語はカイン語である。またこの地区だけは塊村状になっており、周囲を高い木立に囲まれているため外からは家屋を見ることができない。これらの点においても、Z村内のビルマ族集落とは景観を異にしている。この地区の村人とビルマ族との通婚は皆無である。

ユワジー（ywagyí）地区とユワレー（ywalēi）地区の住人はすべてビルマ族で、トゥダマー（thūdama）派に属する仏教徒である。ユワジーとは「大きな村」という意味であり、文字どおりZ村の中心部となっている。小学校と二つの寺院がこの地区にあり、村に3軒だけあるトリモリ・ゼーサイン（toulimouli zēhsain）と呼ばれる雑貨店もこの地区に集中している。またユワジーの南部には、水田地帯に張り出すようにサッカー場があり、青少年たちの遊技場となっている。しかし、雨期には水で覆われて使用不可能になり、乾期になるとここは供出物の集荷場となるので、チンロン（hcīnlōun）と呼ばれるビルマ式の蹴鞠やサッカーが実際に行われる頻度が高いのは、乾期になると乾ききってカチカチになる水田に於てである。

ユワジーはさらに、ガモーイエイ三日月湖にかかる小橋と墓地の北端を結ぶ線を境に、北西側の「西部地区」（anau'pāin）と南東側の「東部地区」（ashèbāin）の二つに分かれ、さらに東部地区は村の幹線道路に面した地区と、三日月湖によってユワジーと隔てられた「ホーベッチャン」（hoube'hcan＝向こう側の庭）と呼ばれる地区（II'）の二つの部分から成っている。西部地区の村人

は西寺院の檀家であり、東部地区およびユワレーの村人は東寺院の檀家である。両者はあまり仲が良くなく、通婚も地区内のものと比べて極端に少ない。村人たちの話によると、この不仲の理由は寺が二つあることにあるという。

ユワレーとは「小さな村」という意味であり、もともとはユワジーの出作小屋⁽⁴⁾が数戸立地していただけだったが、世代が下るにつれて村人が定着するようになった。ただし、いつごろからこの地区がZ村の枝村と見なされるようになったかは定かでない。フレグー町からユワジーの中へ入る道は比較的整備されており、1989年には自動車が入れるようになった。だが、ユワジーからユワレーへの道は、畦道より若干広い程度の小道であり、徒歩でしか通ることができない。またユワジーの屋敷地は土手や生け垣を境にして水田との区分が明確であるが、ユワレーの場合、水田と屋敷地の高さはほぼ同じであり、水田との境界がはっきりしない屋敷地もあって、出作小屋の頃の雰囲気を残している。この地区には寺院、学校、墓地などがなく、文化的あるいは宗教的機能はすべてユワジーに負っている。また商店もここにはない。

2. 土地利用と農作物

村の土地利用状況は第7表のとおりである。村の94%を耕地が占め、耕地の99%を水田が占めており、水田の中に村があるといっても過言ではない。休閒地の面積は調査時点の前年は35エーカー、調査時で49エーカーであったが、その翌年は79エーカーが休閒地であった。休閒地は村から遠く、低地で水の過剰による水害を受けやすい。そのような劣等地が実質的には耕作放棄され、統計上は休閒地として扱われる。その面積が増加傾向にあるのは、後述するように、籾の供出価格が安く政府の管理が厳しいため、生産意欲が減退しているからである。また、1986/87年度のZ村内の水田の耕作面積は2699エーカーだったにも関わらず、Z村村民によって水稻が作付されている面積は、筆者の調査によると791エーカーにすぎず、残りの水田は他村の村民によ

第7表 Z村の土地利用状況(1986/87年度)

地 目	面積 (エーカー)	百分比 (%)
耕 地	2,773	94.0
水 田	2,748	93.1
うち作付地	2,699	
休閒地	49	
菜 園	25	0.8
三日月湖	10	0.3
その他(屋敷地, 道路, 池等)	169	5.7
計	2,952	100.0

(出所) 高橋昭雄「下ビルマ米作村における農地政策の展開, 1957~87年」(『アジア経済』第31巻第2号, 1990年2月)。

って耕作されていた。この理由は第IV章で述べることにする。

村には八つの飲料水用の池がある。寺院地内の池は東寺院および西寺院が、サッカー場の隣の池はドー・キンテイン(17)が、それぞれ所有するが、他の五つの池は村有である。しかし、私有村有を問わず村人はどの池からも自由に水を汲むことができる。池の所有者には池にいる魚と池の回りのマンゴの木の実を自由に処分する権利がある。池の中で水浴することや、池の中および池の堤上に家畜を立ち入らせることは固く禁じられている。

周辺他村の地勢的条件と比較してZ村に特筆すべきこととして、「古ガモーイェ川」と呼ばれる三日月湖の存在がある。面積は10エーカーほどであり、乾期になるとガズンユエツ(gazunywe')と呼ばれるえん菜の一種が栽培され、村人に貴重な現金収入をもたらす。

すでに述べたように、この地域では雨期が5月下旬に始まり10月まで続き、年間2500ミリメートルを超える降雨のすべてはこの期間に集中する。Z村の生産活動の中心は、この雨を利用した水稻作であり、この時期水田では稲以外は何も栽培されない。稲作の農業用水はすべて天水に頼っており、水田にはいかなる灌排水設備も見られない。

乾期にはほとんどの農家⁽⁵⁾が落花生の栽培を行っている。しかし、作付面積

は64.3エーカーにすぎず水稻の作付面積の1割にも満たない。用途は自家消費用の食用油の製造のために利用され、ごく少数の農家を除いては現金収入をもたらすことはない。

菜園では落花生、バナナ、茄子、セインザーウ (sēinzāu) と呼ばれる生食用の芋、菊などが栽培されている。村全体が低湿地にあるため、降水量の多い年は冠水して収穫皆無となる菜園も多く、冠水しにくい菜園ほど良質であるとされている。菜園での野菜栽培においては、乾期に掘抜き井戸の利用が見られる。

ヤンゴンという大都市の近郊にありながら、ヤンゴン向けの近郊農業はほとんど展開しておらず、ヤンゴンやフレグーの町に野菜や牛乳を売りに行く世帯がわずかにあるだけである。したがって、Z村の農業生産は都市から遠くはなれた下ビルマの典型的米作村と大きく変わるところはない。

3. 村の歴史

村人たちの話によると、現在のZ村にビルマ族が居住しはじめたのは、コンバウン朝を建てたアラウンパヤー王が下ビルマを制圧した1750年代であるという。それ以前のZ村はモン族の村であった。この地にモン族が村を作ったのは13～14世紀頃であるといわれているが、正確な年代や当時の村名は明らかでない。現在の村名の謂れも定かではないが、村のあちこちにあるズィーディー (zidhi, イヌナツメ) の木とガモーイェイ川の「渦」を指すビルマ語に因んだものであることは間違いない。コンバウン時代に下ビルマに移住してきたビルマ族が、先住民族のモン族を追放あるいは同化しながら、ダゴンをやンゴンと変えたように、このような小さな村の名前もビルマ語に変えていったのであろうか。村の由来にはもう一つの説がある。英領植民地期に、ヤンゴン＝マンドレー道路がガモーイェイ川を渡る橋の付近にズィーピン港 (zipin zei) という小さな船着場があり、ここを中心としてフレグーの町が発

第8表 Z村の世帯数、人口および宗教別人口の変化

年次, 村名	世帯数 (戸)	人 口 (人)	宗 教 別 人 口		
			仏 教	キリスト教	ヒンドゥー教
1891年					
東Z村	} 182	888	881	6	1
西Z村					
北Z村					
パウッコウン村	39	221	106	115	
1901年					
東Z村	34	150	150		
西Z村	130	649	648	1	
パウッコウン村	23	171	100	71	
1911年					
Z村	124	592	576		16
パウッコウン村	37	194	70	124	
1921年					
Z村	118	623	549		24
パウッコウン村	19	97	1	86	10
1987年					
ユワレー	24	146	146		
ユワジー	91	486	486		
パウッコウン	21	110		110	

(注) 1987年の数値はZ村の全世帯数138世帯から、未調査の2世帯(ユワジー、ユワレー各1世帯)を除いた数値である。

(出所) *Census (Provincial Report)*, 1989, 1901, 1911, 1921年版, および筆者調査(1987年)による。

展していった⁽⁶⁾といわれているが、Z村の名称はこの船着場の名前に因んでつけられたと話す長老がいるのである。だとしたら、Z村ができたのは下ビルマが植民地化された1852年以降で、コンバウン朝がイギリスによって滅ぼされる1885年までの間、ということになる。

Z村の名前が植民地政庁のレポートに登場するのは、1891年のセンサスからである(第8表参照)。当時のセンサスにはZ村はなく、東Z村、西Z村、北Z村およびパウッコウン村の四つの村の名前が載っているだけである。この4カ村の世帯数および人口をそれぞれ合計すると、現在のZ村の規模よりかなり大きく、1891年よりかなり以前からこの地域への人口の移動が始まって

いたのではないかと想像される。東Z村、西Z村およびパウッコウン村は、明らかに今日のユワレー、ユワジーおよびパウッコウン地区である。そして北Z村は、古ガモーイエ川（三日月湖）に流れ込む小川を境にZ村と接する、現在はフレグー町に含まれている小集落を指すものと思われる。Z村やフレグー町に住む多くの人々は、現在でもこの小集落はZ村に属するものの観念をもっており、例えば筆者の調査中にこの小集落で起こった強盗事件は、Z村で起こったものとして報道された⁽⁷⁾。また地理的にもフレグー町と北Z村との間には家のない水田地帯が広がっていて、境界は明瞭であるが、北Z村とZ村の間は簡単に見過ぎてしまうような小川を境にはしているものの集落はほとんど一体となっており、外来者には両村の境界はきわめてわかりにくい。北Z村は1901年のセンサスには載っておらず、1891年からの10年の間にフレグー町に併合されたものと思われる。そして、1908年に“Village Tract”すなわち村落区の制度が制定され、東Z村と西Z村が合併してZ村ができた。しかし、パウッコウン村は併合されずに、1911年のセンサスでは単独で一つの村落区としてその名前が掲載されている。1921年時点でもパウッコウン村はZ村に併合されていない。だが、当時の両村を合わせた世帯数および人口規模は現在のZ村のそれとほぼ同じになっており、現在のZ村の原型は1910年代にできたものと推測できる。Z村の長老たちはパウッコウン地区は昔からZ村の一部であったというが、植民地時代を通じて、少なくとも行政的には同一の単位に属したことはなかったようである。しかし、後述するように、1957年の農地改革においてはパウッコウンはZ村の一部として扱われており、独立（1948年）後にZ村落区に併合されたものと思われる。

植民地期に併合が見送られたのは、パウッコウンが当時のZ村とは異なるコミュニティであると見なされたからであろう。その根拠は、両地区が地理的に独立しているだけでなく、民族と宗教が違うことにあるということはずでに述べた。だが第8表に示すように、1891年センサス時点でのパウッコウンには、キリスト教徒であるズゴー・カイン族と仏教徒であるビルマ族がほぼ同数居住しており⁽⁸⁾、また1901年には、仏教徒の方が優勢になり、日常語で

分類すると、ビルマ族105人、カイン族66人⁽⁹⁾となり、ビルマ族の方が多くなる。さらに、1911年にも多くのビルマ族がパウッコウンに住んでいる。「Z村とパウッコウンは一体であった」との長老の言葉はこのような状況を指すのであろう。ところが、1921年になると突然ビルマ族がいなくなり、パウッコウンの世帯数は37世帯から19世帯にほぼ半減する。1911年から21年までの間にこの村からのビルマ族の脱出があったことは明らかであるが、残念ながら村人にはそのような記憶はなく、移住の理由は不明である。だが、植民地政庁の分断統治あるいはカイン族優遇政策と何か関連があるように思われる。ともかくこうした歴史的経緯によって、Z村における両民族の棲み分けが成立したのである。

第I章で植民地期にインド人が農村部にも浸透したと述べたが、Z村にもヒンドゥー教徒すなわちインド人が入って来ている。1911年で16人、21年にはパウッコウン村も含めると34人のインド人が住んでいたことが第8表から読みとれる。村人たちの証言によると、彼らはチェティアの小作人であった。20世紀初頭からフレグー郡では農地に対する人口圧力が高まり、所有権だけではなく用益権も含めた農地の獲得競争が激化したことはすでに述べたが、Z村におけるこの競争の勝利者の一部はインド人であったようである。インド人の増加と対照的に、Z村（パウッコウン村も含めた）では1901年から21年にかけてビルマ族の人口が減少している。ビルマ族農民・農業労働者を追い出すような形でインド人が入って来たものと考えられる。後述するように、当時のZ村の農地の多くはチェティアに所有されていたこと、およびインド人地主はインド人の小作人を好み、小作契約は1年であり更新されないことが多く⁽¹⁰⁾、地主は小作人を簡単に変更できたことを考え合わせるならば、この推測はかなり蓋然性が高い。

独立後、いつごろからかは不明であるが、インド人はZ村からいなくなり、チェティア所有の農地は農地改革によってビルマ人（ビルマ族とカイン族）に配分された。その経緯については章を改めて第IV章で述べることにする。

- 注(1) Z村の世帯総数は138世帯であるが、筆者が調査できたのは136世帯であった。未調査世帯2世帯のうち、1世帯は乾期の農閑期を利用してヤンゴンに一家で仕事に出ていたため、調査期間中に会うことができず、他の1世帯には回答を拒否された。両者とも経営農地を持たない農業労働者世帯である。以下特別のことわりがないかぎり、調査対象世帯数の136世帯を以てZ村の総世帯数として議論を展開する。なお、世帯の定義については第III章で述べる。
- (2) ここで用いる自然村という概念は、鈴木栄太郎の言う「自然村」と必ずしも一致しない。ビルマ語でユワ・バイン (ywa bâin) と言われる、村人たちが漠然とひとつのコミュニティと考えている範囲を、本書では自然村と呼ぶことにする。上ビルマでは、村のナット神 (ywa sàun na') の影響下にある範囲が自然村と一致するが、下ビルマでは必ずしもそうではない。Z村の場合は、寺院が各地区別々に設けられていることが、地区ごとの自然村の一体感と関係があるように思われる。「自然村」については、鈴木栄太郎『日本農村社会学原理 上』(鈴木栄太郎著作集 I)、未来社、1968年、56ページ、を参照のこと。
- (3) 高橋昭雄「上ビルマ灌漑村……」, 151~152ページ。
- (4) 自宅から水田が遠い場合、農繁期に水田の近くに簡単な小屋を建て、家畜や資材置き場あるいは宿泊のために利用する。このような小屋をビルマ語でレーサウンテー (lesàuntè) すなわち「田を見張る小屋」と言うが、これを「出作小屋」と訳すことにする。
- (5) 農家の定義については第III章で述べる。
- (6) 『郡地誌』, pp. 6-7.
- (7) *cèimoun*, 23 June 1987.
- (8) Government of India, *Census of 1891, Provincial Tables* (Rangoon : Government Printing, 1892), p. 137.
- (9) Government of India, *Census of India, 1901, Vol. 12B, Burma, Pt. 3, Provincial Tables, Lower Burma* (Rangoon : Government Printing, 1905), p. 137.
- (10) J. S. Furnivall, *An Introduction to the Political Economy of Burma*, 3d ed. (Rangoon : Burmese Advertising Press, 1957), pp. 65-67.